

「二合田用水」

360年余りの時を超えて

「二合田用水」とは、今から約360年前の江戸時代、二本松藩の初代藩主であった丹羽光重公の命により造られた用水のことです。

光重公の祖父・長秀公は、織田信長公の下、織田四天王といわれた武将であると同時に、安土城築城の折には総普請奉行（総責任者）を任せられ、父・長重公は、城としての評価が高い棚倉城や白河小峰城を築城しています。

光重公は、こういった城づくりに優れている有能な家臣団を引き連れて西暦1643年に二本松へ入府し、城づくり・城下町づくりを手掛けながら、安達太良山中腹の烏川沿いの大堰取水口から城内や城郭外へ水を引く導水工事を進めました。この工事により完成したのが「二合田用水路」です。最終的に完成したのは

1700年といわれ、全長は約18キロメートルにも及びます。

二合田用水は、ほかに「御用水」とか「二本松用水」と呼ばれることもあります。県の登録用水名に記載されている「二合田用水」というのが一般的です。江戸時代、城の修繕工事などを行う場合には幕府の許可が必要でした。しかし、許可を得るのが大変だったため、無許可で用水路工事を行ったという説があります。その秘密を守るため「罪人が逃げ出したので藩は山狩りをしてい」との噂を流したとも伝えられています。証拠を残さない為だったのか、当時の資料はほとんど残っていません。

「なぜ二合田用水が必要だったのか」。二合田用水の歴史と今を紹介します。

名前の由来

昔、この用水の終点部分に「二合田」という地名の10軒ほどの集落があり、二合田用水の流路の中でこの地が最初の受益地だったことから、この地名をとって「二合田用水」と呼ばれるようになったのではないかとわれています。

この「二合田」という地名は今では存在しませんが、昭和30年代の二本松町合併の時に「二合田」と「伊佐沼」、そして昔あった地名の「滝沢」という地名のそれぞれの頭文字をとって、現在の二伊滝という地名が命名されたといわれています。

なぜ二合田用水は必要だったのか

二合田用水は、城および城下の防備・衛生・防火と農業用水として計画され整備されました。二本松城はもとと



▲二合田用水の取水地点の上部に奉られている水神様は昭和11年に建立されたもの。二合田用水路周辺は現在、春と秋に受益者らの手により一斉に清掃作業が行われ、作業が始まる前に二合田用水路維持管理委員会のメンバーがこの水神様の前に集まり、塩・煮干し・清酒を供え、参拝してから作業を行う。



▲二合田用水の取水口部分。奥に見えるのが烏川から取水する際の樋門。岳ダムが主水源となった現在は、この上流部分の水路は用水路としては使用されていない。



▲箕輪門通りの現在の水路。この通りは「日本の道100選」にも選ばれている。

水に乏しく、城内にあった井戸の中でも飲料水として利用できたのは、現存する「日影の井戸」だけだったといわれています。また城下では、飲料水・生活用水は井戸水で十分間に合っていました。六角川や鯉川は水量が少なく、年間を通して水量に変化がないことが求められる防火・衛生用には適さず不十分であったといわれています。

また江戸時代の藩経済は、領民による農業生産力（ほとんどが年貢米）がその基盤であり、新しい田んぼを開拓して耕地を増大させることが重要でした。農業用水となる河川が少ない二本松藩にとって、どうしても水の確保が緊急の課題だったのです。光重公が二本松藩へ来た時、領内では度重なる天災等で凶作が続き、農民たちは飢えや悪疫に苦しめられていたことから

も、光重公は早期に疎水工事の重要性を認識し計画・実行したといわれています。

近現代の二合田用水

戊辰戦争により、二本松城は落城し焼失しました。近代国家を創立し、富国強兵を目指した明治新政府。二本松では明治6年（1873）、旧城跡に全国でもまれな近代式設備をもった製糸工場が設立されました。製糸生産には、使用する水の良否が大きく影響するとされていた中で、江戸時代に城内へ引かれた清らかな二合田用水はうってつけであったといわれています。

二合田用水路は郭外6町の道路中央にも敷設されていましたが、二本松製糸等の視察に時の太政大臣（当時の政府最高官職）が来ることになり、迎える準備として全て砂利等に埋め立てられ、明治17年に

衛生・防火用水としての使命を終えています。

昭和46年から岳ダム工事が始まると、それに合わせて昭和52年から二合田用水路の大改修工事が行われました。昭和54年に岳ダムが完成したことで、二合田用水の主な水源は岳ダムからの水となり、320年ほど続いた大堰取水口の役目が終わりました。

現在、田植えを行うときは、土日祝日などに一斉に行われることが多く、水が必要となる時期が重なります。そういった中、常に一定の貯水をしている岳ダムが主水源となった二合田用水は、昔よりも安定して田んぼなどへ水を供給することができるようになりました。



当時の

二合田用水経路

安達太良山山頂付近の雪解け水は地中に浸透し、何十年もの年月をかけて山の中腹にある「熊の穴水源」より湧き出します。

この水が鳥川へ流れ込んだものを大堰地点で取水する箇所が二合田用水路の起点となり、そこから大関、板目沢、二伊滝地内を経て城内外へ流れ込んでいました(上の地図参照)。

工事経過

幕府には内密で

安達太良山中腹の取水口より二本松城までの延長は14キロ、そこから郭内外へ延長4キロ、標高差は約500メートルという二合田用水路の大工事。二本松藩の直轄工事であったことは間違いないと思われるのですが、藩の公式文書には何一つ記載が残されていません。このことから幕府に対し無届けの隠し工事であったことが推測されています。ではこの大工事をどのようなにして進めたのでしょうか。

測量

水路の測量は、夜間に数人の人夫に提灯をもたせ高低を目測し、近距離のところでは線香を使って測量したと伝えられています。東北自動車道の上に架かる百間樋から二本松城跡までは、1パーセントの傾き(100メートル進んで1メートル下がる)なので、高度な測量技術が求められたと推測されます。

工法

二合田用水路のルートが決定すると、1日50人から300人といわれている人夫を動員して水路部分を掘り下げていきました。地盤が砂や小石のところは、底に石張りをして水の浸透を防ぎ、所々には洪水時の水を水路外へ排水する地点を設けていました。また水路上流部と末流部には急流部分があり、素掘り用水路では浸食してしまうため、落差工を設けて流速を落とすことを考慮した跡が所々にみられます。

道具

現在と違って機械はなかったもので、「すき」や「くわ」を使って掘り起こし、「もっこ」や「ちみ」を使って運んだものと思われます。

立役者

二合田用水を語る上で忘れてはならない人物が2人います。二合田用水を考えた「山岡権右衛門」と、測量・設計を行った「磯村文蔵」です。

山岡 権右衛門

二合田用水を発案した人物。1622年、丹羽家が棚倉藩主の時代に召し抱えられ、棚倉城、その後の白河小峰城改築の際に重用される。二本松藩へ入府後、二合田用水の建設では、測量にあたった磯村文蔵を藩へ推挙したと伝えられる。二合田用水は幕府の許しを得ない工事だったため、権右衛門は藩士の身分を離れて工事の具体的計画を進めたと伝えられている。

磯村 文蔵

算学者で二合田用水の測量・設計を行った人物。尾張国(愛知県)で生まれたといわれており、肥前(佐賀県)鍋島家に仕えていた。城の修築や城下の町割りのために専門家を必要としていた二本松藩は、1658年、当時国内で有名だった算学者の文蔵を召し抱え、二合田用水の測量・設計に当たらせ、1661年には藩より100石を受領し武士の身分に出世した。1700年に二合田用水を完成させた後も藩の要職を務め、現在は市内根崎の善性寺に眠る。

二本松藩と 二合田用水の変遷

1600年	西軍についた丹羽長重公は徳川家康公率いる東軍に敗れ、蟄居の浪士となる
1619年	長重公、常陸国江戸崎2万石へ移封
1622年	長重公、常陸国棚倉5万石へ加増移封。後に棚倉城を築城
1627年	長重公、白河10万700石へ加増移封。後に白河小峰城を改築
1643年	丹羽光重公、二本松へ国替え入府。初代二本松藩主となる
1652年	このころ山岡権右衛門らにより二合田用水建設計画がたてられる
1658年	磯村文蔵が二本松藩へ仕える。このころから二合田用水の本格整備が始まる
1679年	光重公の隠居により、長男の長次公が二本松藩第2代藩主となる
1700年	二合田用水路完成(推定)
1701年	丹羽光重公死去
1868年	戊辰戦争により二本松城が落城
1979年	岳ダムが完成し、江戸時代からの大堰取水口の役目を終える

現在の二合田用水 と管理

現在の二合田用水は、水源を主に岳ダムからの水へ移し、所々改修しながらも、昔からの流路で各地へ分水しながら、今も多く田んぼで利用されています。また霞ヶ城公園内では、滝や池などの景観用としても利用されています。

この二合田用水は現在、農家の皆さんで組織する二本松市土地改良区の「二合田用水路維持管理委員会」が中心となつて、水路の清掃や補修、水の管理をしています。



▲昨年の草刈りの様子

『二合田用水路探検ウォーク』参加者募集！



江戸時代に開削された二合田用水路。今も貴重な水資源を私たちに供給してくれています。昨年に続き2回目となる探検ウォーク。先人たちが築き上げた遺産を肌で感じてみませんか。

日時 7月31日(日) 10:00~16:00(受付時間: 9:30~)

※雨天中止 ※各施設へは事務局車両で移動

集合・解散 霞ヶ城公園少年隊群像前

順路 霞ヶ城公園→高平配水場→大堰(二合田水源)→岳ダム(昼食)→岳ダムトンネル→大隣寺(丹羽家墓所参拝)→霞ヶ城公園

※今回は提灯測量を再現し、実際に体験してもらいます

参加費 無料 **申込期限** 7月22日(金)

定員 30人(先着順)※小学生以下は保護者同伴

服装等 水場での見学・体験となりますので、長靴(水路内は原則着用)や着替え、タオルの準備をお願いします。昼食には二本松産米のおにぎりを用意しています。

◎問い合わせ・申し込み…二本松市土地改良区事務局(農林課内) ☎(55)5118

～ interview ～



二本松市土地改良区「二合田用水路維持管理委員会」委員長 菅澤傳治さん

歴史あるこの用水路を、これからも守り続けたい

日本のどの地域でも同じように、農村の過疎化、高齢化等により、農家戸数の減少が顕著になってきている現在、用水路を田畑の受益者だけで維持管理していくのはなかなか大変な時代になってきました。

しかしこの二合田用水は、単に田んぼの引き水としてだけではない歴史的な価値があるものだと思います。

江戸時代からこの地域に潤いを与えてきたこの用水路を、これから守り続けたいと考えています。

農業用水といっても、その受益者は田んぼを作る農家だけではなくありません。現在も昔と変わらず、火事の際は水をせき止めて消火用として使用し、家庭から出る生活排水は、用水路へ排水され川へ流れ込んでいます。また用水路を利用する稲作は、私たちにおいしい米を提供してくれる他、美しい田園風景を残してくれています。

歴史的にも大きな価値のある二合田用水ですが、当時の資料は残念ながらほとんど残っていません。そのため、この貴重な水路の歴史的由来や背景が時代とともに風化してしまうことが懸念されます。しかし、地元の二本松北小学校では、現在も総合学習の時間に、実際に水路を見学しながらこの二合田用水の歴史を学んでいるそうです。二本松市の貴重な歴史を、子どもたちがしっかりと受け継いでくれています。

【参考図書】

安達太良山の水二合田用水を行く(渡邊明雄著、歴史春秋社発行)